

# 沖五十周年記念コンクール入選発表表

## ●俳句の部

入選一位	神輿の町	森村江風
入選二位	神遊び	小倉征子
入選三位	佞武多	須賀ゆかり
入選四位	百の声	柴崎英子
入選五位	花の島	柴田近江
佳作一席	汐鳴	栗坪和子
佳作二席	湿原	小坂尚子
佳作三席	日の器	佐久間由子
佳作四席	祈りの	牛島晃江
佳作五席	利尻・礼文	大沢美智子
佳作六席	母校	川高郷之助
佳作七席	煙づた	和田満水
佳作八席	秋干	朝長美智子
佳作九席	蘇生	木村あさ子

## 選考経過

### 俳句の部

五十周年記念コンクール俳句の部は20句で募集、応募総数67篇。作者名を伏せてコピーし、予選委員に送付。審査、採点后、辻美奈子編集長立ち合いのもと、オンラインによる予選選考会を実施。22篇を予選通過とし、さらに主宰が全篇を通読し選考後、3篇を繰り上げ通過とした。

25篇の作品を原句通りパソコンにて清記、校正の上、本選委員に送付。百点満点で採点を依頼、うち下位7篇（概ね予選通過作品の3分の1）を60点、ほかは適宜配点とした。結果は別表の通り。上位5篇を入選、以下五百点以上の9篇を佳作、うち会員作品1篇を努力賞とした。

## ●論文の部

入選一位	「芭蕉と杜国」	大久保志遼
入選二位	「俳人という「まれびと」 ―能村登四郎句集「民話」を読む―	鈴木光影
入選三位	「芭蕉とその時代」	大矢恒彦
佳作一席	「俳句の表記規定に 関する一考察」 漱石の詠んだ 家族の俳句	和田満水
佳作二席	「芭蕉句における 「行く春・秋」の一考察」	福島 茂
佳作三席	「努力賞」	白井秀明

## 論文の部

テーマは自由で募集。応募総数6篇。執筆者名を伏せてコピーを選者に送付。10点満点で審査を依頼した。上位3位を入選、以下2篇を佳作、会員による1篇を努力賞とした。

## 随筆の部

テーマは自由で募集。応募総数15篇。予選なしとした。執筆者名を伏せてコピーを選者に送付。10点満点で審査を依頼した。上位5篇、（3篇が同点につき同位）、以下2篇を佳作、会員による1篇を努力賞とした。

## ●随筆の部

入選一位	「四十八色のクレヨン」	栗坪和子
入選二位	「忘れ得ぬ人々」	清水佑実子
入選三位	「身に纏うもの」	石田 静
佳作一席	「救急車と我と」	甲州千草
佳作二席	「其角って誰」	平松うさぎ
佳作三席	「子爵さん家」	大橋松枝
佳作四席	「どこへ」	町山公孝
佳作五席	「ミャンマー」	橋本哲夫

※三部門とも入選・佳作は主宰との協議によるもので、努力賞は主宰の意向による。

※論文・随筆一位作品は本号に掲載、以下、入選作品は順次沖誌に掲載する。

令和3年「沖」50周年記念コンクール〈論文の部〉成績順位表

順位	題名	選者				合計点	
		氏名	能村	森岡	大畑 広渡		
入選一位	1 芭蕉と杜国	大久保 志 遼	9	8	10	10	37
入選二位	2 俳人という「まれびと」 —能村登四郎句集『民話』を読む	鈴木 光 影	10	10	8	6	34
入選三位	3 芭蕉とその時代	大 矢 恒 彦	6	9	9	8	32
佳作一席	4 俳句の表記規定に関する一考察	和 田 満 水	5	8	5	9	27
〃	4 漱石の詠んだ家族の俳句	福 島 茂	5	9	7	6	27
佳作二席 (努力賞)	6 芭蕉句における「行く春・秋」 の一考察	白 井 秀 明	5	7	6	6	24

令和3年「沖」50周年記念コンクール〈随筆の部〉成績順位表

順位	題名	選者				合計点	
		氏名	能村	森岡	藤原 岡部		
入選一位	1 四十八色のクレヨン	栗 坪 和 子	10	9	6	10	35
入選二位	2 忘れ得ぬ人々	清 水 佑 実子	8	8	10	8	34
入選三位	3 身に纏うもの	石 田 静	5	10	3	9	27
〃	3 救急車と我と	甲 州 千 草	5	7	9	6	27
〃	3 其角って誰	平 松 う さ ぎ	8	7	5	7	27
佳作一席	6 子爵さん家(ち)	大 橋 松 枝	6	7	4	4	21
佳作二席	6 どこへ	町 山 公 孝	5	7	8	1	21
佳作三席 (努力賞)	8 ミャンマー	橋 本 哲 夫	5	6	7	1	19
	9 これからの生き方「おばさんが横 に置きたくなるおじさんになる」	和 田 満 水	7	8	2	1	18
	10 人生に俳句	安 部 潤	9	6	1	1	17
	10 楽しかりし年月 —能登の田舎町のわが高校生時代—	小 島 史 子	5	6	1	5	17
	10 気ままに俳句	工 藤 良 丕	5	6	3	3	17
	13 地獄谷「よりみち」	石 川 笙 児	5	8	1	2	16
	14 シニアの俳句事始め	石 川 弘 道	5	8	1	1	15
	15 茶道と俳句に感謝	西 原 千 鶴子	5	6	1	1	13

令和3年「沖」50周年記念俳句コンクール成績順位表

順位	題名	選者							合計点	
		氏名	能村	森岡	宮田勝	千田百	辻	荒井 岡部		
入選一位	1 神 興 の 町	森 村 江 風	90	95	95	72	85	88	70	595
入選二位	2 神 遊 び	小 倉 征 子	85	80	100	77	80	90	65	577
入選三位	3 佞 武 多	須 賀 ゆかり	75	88	90	85	87	86	64	575
入選四位	4 百 の 声	柴 崎 英 子	80	92	75	90	70	89	67	563
入選五位	5 花 の 鳥	柴 田 近 江	75	85	80	96	70	69	80	555
佳作一席	6 汐 鳴	栗 坪 和 子	60	85	75	94	80	84	62	540
佳作二席	7 湿 原	小 坂 尚 子	70	76	75	80	93	80	64	538
佳作三席	8 日 の 器	佐久間 由子	77	75	70	82	75	76	82	537
佳作四席 (努力賞)	9 祈 り	牛 島 晃 江	60	86	75	87	70	82	70	530
佳作五席	10 利尻・礼文	大 沢 美智子	80	90	60	74	75	83	60	522
佳作六席	11 母 校	川 高 郷之助	65	82	95	65	78	71	65	521
佳作七席	12 煙 づ た ひ	和 田 満 水	85	74	70	60	92	60	76	517
佳作八席	13 秋 干 潟	朝 長 美智子	80	68	85	60	82	70	65	510
佳作九席	14 蘇 生 中	木 村 あさ子	70	78	75	60	90	67	60	500
	15 祭 鱧	林 昭太郎	60	72	60	83	60	63	90	488
	15 冬 景 色	能 美 昌二郎	65	60	75	88	60	60	80	488
	17 名 草 の 芽	浜 崎 喜美子	60	75	80	70	65	75	62	487
	18 ヒマラヤ杉	関 根 瑤 華	70	60	90	68	60	60	74	482
	19 大 本 山	大 橋 松 枝	65	70	75	60	76	70	60	476
	20 井戸神に月	小 形 博 子	65	60	60	81	75	65	62	468
	21 老 樹 医	山 下 洋一郎	60	60	60	79	60	74	60	453
	22 山 茶 花	道 端 齊	60	60	90	60	60	60	60	450
	23 花 回 遊	渡 辺 輝 子	70	60	60	76	60	60	60	446
	24 安 宅 の 関	米 田 紀 子	60	75	60	60	65	60	64	444
	25 甲斐府中	荒 井 千 瑛子	65	60	60	60	60	60	60	425

## 森村 江風 神輿の町

この度は沖五十周年記念俳句コンクールにおきまして光栄にも第一位を賜り誠に嬉しく思っております。この「神輿の町」は江戸時代より塩田と舟運で栄え、寺社が多く、堂宮彫刻師や仏師などの職人が大勢住んでいた町・行徳です。神輿屋も平成初期までは三軒あり、母の生家「浅子神輿店」もその一つで、十五年前の廃業まで多くの江戸神輿を作っておりました。現在、店舗は国の有形文化財に登録され、神輿や行徳の祭などを紹介展示する資料館となっております。私は幼い頃から神輿職人の傍で木の香りや漆の匂い、鑿の動きや鑿の音に親しんできました。また行徳には三年に一度、例

大祭が行われ、大神輿は独特な揉み方で五つの町内を盛大に渡御されます。今回の二十句にて、地元行徳の風土を少しでも感じて頂けたら幸いです。最後になりましたが、この賞の選考に当たられました先生方には心より御礼申し上げます。

### プロフィール

平成24年 「沖」入会  
平成25年 第二十七回千葉県俳句作家協会新人賞受賞  
平成26年 「沖」新人奨励賞受賞、  
「沖」同人  
平成28年 句集『銀河の一滴』上梓  
平成29年 「沖」珊瑚賞受賞



春立つや木地師木を選る指の腹  
浅蜷汁飯とかつ込み朝を急く  
春雷や彫師の鑿に龍の浮く  
宮薙や紙垂あらためて四方の風  
船渡御の龍の舳先が川を割る  
蔵跡の西日ぢりぢり鹽の町  
潮焼けの皺は強面土地ことば  
神棚へ晒託して祭待つ  
悶着を重ね重ねて宵祭  
天へ地へ差し擦る放る荒神輿

咆哮す宮入拒む荒神輿  
祭笛尽きて小若は母の胸  
御霊返し神輿巨体の息を抜く  
潮入に町挟まれて鯨日和  
虫すだく屋号息づく旧街道  
数へ日や鑿打つ音に乱れなし  
三が日鋳師謝する座り胼胝  
匠とて名を残さざる冬銀河  
大寒の底で座職の煮る膠  
塗師の篋光均して春隣

## 小倉 征子 神遊び

近年は膝や腰の不調で、ちょっとした外出でさえ杖が必要になってきたが、季節感を外に求めなくても、わが家の庭に万葉苑、と言えば聞こえはいいが要するに野草園がある。樹木の剪定から除草まで、野菜園とともに夫の管理下にある。年中、何かの花が咲き、何かの野菜が採れるのはうれしい。「それにしても、君の句は季節感に乏しいのではないか」と、彼は少し不満げである。観天望気というが、彼の方がなんでも先に気づくのが悔しい。

わが家の野草園で十分な癒しと刺激を受けながら、自分の俳句を探り続けているが、だんだんに難しくなってくる。

今回のご褒美を大事にしたいと思っている。

### プロフィール

昭和20年 福岡県生  
昭和40年 療養中に手解きを受ける  
令和元年 数誌を経て「沖」入会  
令和2年 初巻頭  
令和3年 「沖」同人  
俳人協会会員  
句集「夏帽子」「風信」



冬の辻肩の瘦せゐる猿田彦  
水涸るる鷺の狩場を過ぎてより  
午後田に人をらずなり冬雲雀  
麦の芽に雲の行き来のただならず  
旅を継ぐ冬田越えても冬田かな  
軒に吊るもろこし隠れ里の冬  
格子戸の拭き窪みたる神楽宿  
闇払ふやうに楢木を足しに足し  
冬霧の村に一夜の氏子なる  
炉あかりや一音狂ふ馴らし笛

方二間自在に使ひ里神楽  
狼藉を尽くし神楽の道化神  
振舞ひの猪汁と酒なほ辞さず  
白息を乱し八岐大蛇討つ  
酔ふ囃す囃し倒され神楽鬼  
一徹に神楽の笛の座を守り  
岩戸開き晴れ晴れと吹く神楽笛  
酔ひどれて神となる夜の炉火熾こる  
夜神楽の祝者に賜ふ縁起餅  
暁闇の星限りなし神楽果つ

須賀ゆかり  
佞 武 多

五十周年記念コンクール入選三位を賜り有り難うございます。辻編集長よりの「入選」のメールを読みました時はパソコンの前で身体が固まってしまいう程驚きました。

能村主宰はじめ審査委員の皆様  
に心より御礼申し上げます。

昨年春の外出自粛以降、埼玉県内での吟行を月一、二回ペースで続けております。季節ごとの田園風景は俳句を始めて良かったと思わせてくれる時間です。又、冷静に言葉や季語を探していく作業は至福の時でもあります。

初学の師である青森の小野寿子先生、埼玉支部の武藤様、高橋様一年以上埼玉紙上句会を支えて下

さっている大石様に心より感謝申し上げます。又、青森・埼玉の句友の皆様、沖の諸先輩にも深く感謝申し上げます。感動する気持ちを忘れないよう精進を重ねて参りたいと存じます。

## プロフィール

昭和35年 旭川市生まれ  
平成28年1月 沖入会  
平成28年11月 初巻頭  
平成30年1月 新人奨励賞  
潮鳴集同人  
俳人協会会員



熱情を秘めて真白き佞武多小屋  
若葉風鈴選るときは目を瞑り  
夕焼や笛の音に和ぐ港町  
静けさの岬をつなぐ夏つばめ  
白南風や海へ太鼓の総稽古  
海光へのんびり消ゆる氷菓売  
夕風や光の塊の佞武多発つ  
肌脱ぎて曳手は夜へ漕ぎ出せり  
灯されていよよ血走る佞武多の眼  
みちのくの鼓動よ佞武多来たりけり

大波の青溢し行く佞武多かな  
帰省子の跳ね尽くしたる脹ら脛  
肌寒の津軽を熱く跳人衆  
すつと上ぐ桴の白さや祭髪  
跳人より貫ひし鈴の月のいろ  
ひと夜さの水脈滲ませて佞武多去る  
身のうちに名残りの囃し髪洗ふ  
海鳥は潮目を平し今朝の秋  
夕風や工場の灯と定期船  
夏惜しむ手の中に鈴鳴らすとき